

第6講 プレイウス ー同盟国のスタシスとスパルター

テキスト

Xen. *Hell.* 5. 2.

[8] プレイウスからの亡命者たちはラケダイモン人たちが同盟諸国のうちでそれぞれの国が戦争中彼らに対してどの様であったのかを調査しているのを耳にすると、好機と考え、ラケダイモンに赴き、自分たちが本国に居る間ポリスはラケダイモン人たちを市壁の中へ迎え入れ何処の地へ導いて行こうと共に軍を派遣したのだが、彼らが自分たちを追放すると、誰一人従軍しようとさえせず、ラケダイモン人の誰一人も市門の中に迎え入れようとしなかったと思われる、申し立てたのであった。

[9] 以上の事を聴聞したエフォロイたちは懲罰に値すると判断した。それでプレイウス人のポリスに使節を派遣して追放された人々はラケダイモン人のポリスにとっては友人であり、不正を受けている人々の追放を解除し、強制されてではなく自発的に彼らの帰国に尽力することが正しいと考えていると申し述べたのであった。それでその事を耳にしたプレイウス人は例え自分たちに対して軍が派遣されなくても、市内の者たちの中には彼らをポリスに引き入れようとする者たちがいるのではないかと恐れたのである。それに市内には被追放者たちの多くの親族がおりそれ以外にも好意を抱いている者たちも数多くおり、それに多くのポリスにおいて国制を変革しようと熱望している者たちは亡命者を連れ戻そうとしていた事がその理由であった。

[10] 今述べたようなことを恐れた彼らは亡命者を受け入れること、彼らに公有財産を提供すること、彼らの資産で購入されたものは国庫から代価を受け取ること、もし互いに争いが生じるときには、裁判によって決定されるべきこと、と決議したのである。そのようにしてその時にはプレイウス人の亡命者については今述べたようなことが行われたのである。

講義のポイント

マンティネイアと同じくペロポネソス同盟の構成国

マンティネイアがスパルタと直接国境を接するのに対して、プレイウスはコリントスとアルゴスの中間に位置するアルゴリスにある同盟国
アルキダモス戦争中の親スパルタ派の存在

コリントス戦争以前の時期におけるスタシスと亡命者の可能性
マンティネイアのようなアルゴスとの連携や反スパルタ同盟へは参
画せず

リーガンに依れば寡頭派と民主派の間にスタシスが生じており、この
当時は民主政体制下にあったと考えられている

以下の諸点をテキストから伺うことができる。

1. 亡命者の存在
2. 市内の親スパルタ勢力
3. 親族
4. 変革願望の広がり
5. 当局者のスパルタへの警戒の念

結果

1. 亡命者の受け入れ
2. 資産の返還

その後のプレイウス

1. 内紛の再発と寡頭派の亡命
2. アゲシポリスと民主派
3. アゲシラオスと寡頭派
4. アゲシラオスの介入とプレイウス包囲
5. スパルタへの降伏と寡頭派体制の樹立
6. レウクトラ以後の民主派亡命者の企てと市内の民衆

参考文献

- S. E. Alcock, "Urban Survey and the Polis of Phlius", *Hesperia* 60 (1991), 421-463.
- P. A. Cartledge, *Agésilao and the Crisis of Sparta*, London/Baltimore, 1987.
- R. P. Legan, "Phliasian Politics and Policy in the Early Fourth Century B.C.", *Historia* 16 (1967), 324-337.
- R. Seager, "The King's Peace and the Second Athenian Confederacy", in D. M. Lewis et al. (eds), *The Cambridge Ancient History*, Vol. VI, 1994, 156-186.